

日本台湾学会設立 20 周年記念シンポジウム 「『新たな世代』の台湾研究」
日本の人類学におけるこの 10 年の台湾研究

宮岡 真央子

目次

はじめに

第 1 節 1960 年代から 2008 年頃までの研究動向

1. 1960 年代から 1980 年代まで
2. 1980 年代末から 1990 年代まで
3. 1990 年代末から 2008 年頃まで——三尾論文を参考に

第 2 節 この 10 年の研究動向

1. この 10 年の研究に関するいくつかの指摘
2. この 10 年の課題領域
 - (1) 学史および学史とエスニシティとの関係
 - (2) 物質文化、工芸、生業
 - (3) 歴史民族誌、歴史人類学
 - (4) 植民地期の経験・記憶
 - (5) 境域・越境、周辺地域との比較
 - (6) 宗教

第 3 節 総括と展望

1. 今日の日本の人類学における台湾研究の特徴
2. 10 年前の三尾による「期待」と比較して
3. 今後の研究に対する期待と展望

おわりに

(要約)

日本の人類学におけるこの 10 年の台湾研究の課題領域は、(1) 学史とエスニシティ、(2) 物質文化、工芸、生業、(3) 歴史民族誌、歴史人類学、(4) 植民地期の経験・記憶、(5) 境域・越境、周辺地域との比較、(6) 宗教、に大別できる。また特徴として、①日本植民地期とその後との連続性／不連続性を問う視点、②旧南洋群島・韓国・沖縄との比較、③再帰性の自覚、④現地社会への直接的／間接的還元という志向性、の 4 点を挙げられる。10 年前に今後の進展が期待された都市、トランスナショナリズム、台湾内のグローバル化の研究は、一定程度の進展がみとめられた。筆者自身はこれから、原住民族の政治状況・諸制度、日本で収蔵される学術資料、「新移民」とその子ども世代、現代史などについてさらなる研究の深化を望む。そして、今後も再帰的な場でより多くの実りある研究が生み出されていくことを期待し、そこに自分も参加できるような努力したい。

はじめに

筆者は 1996 年 2 月に旅行で初めて台湾を訪れた。その年の夏から山地の原住民族村落にフィールドワークに通うようになり、以来 20 年余り、原住民族の社会と文化と歴史について人類学の立場から調査研究をしてきた¹。その時間は台湾学会設立以来の時間とほぼ重なるが、筆者の場合、同時に日本順益台湾原住民研究会（一時期は「台湾原住民研究会」と改称、以下双方ともに「原住民研究会」と記す）にも所属してきた。1994 年に発足したこの研究会は、台北市に位置する順益台湾原住民博物館の研究助成を基盤として活動を続け、機関紙『台湾原住民研究』や資料集・

書籍などを刊行し、今日に至っている²。

他者研究の学である人類学において、人類学者は自己の所属する社会とはある程度距離のある社会に身を投じてフィールドワークを行い、その調査資料を持ち帰り、研究成果を自己の所属する社会で公表し、評価を得るとというのが一般的・伝統的なスタイルであり、今日まで主流を占める。そこにおいては、フィールドの人びとが研究成果を目にする機会はあまり想定されておらず、人類学者および彼／彼女が属する学术界や一般社会の抱く知的興味・関心にもとづき調査研究と議論が進められてきた。

このことに鑑みた場合、上記の原住民研究会の活動様態は、日本の人類学においては異例といえる。すなわち、研究対象とする社会からの継続的な助成を受けている点、研究成果が（言語の壁はあるものの）先方にすぐさま伝えられ情報共有されるという点で、上述した人類学の一般的・伝統的なスタイルとはいささか異なるからである。

いうまでもなく、このような活動様態は、日本と台湾の地理的近接性、歴史的関係、それらに起因する研究蓄積、そして今日の台湾社会における日本の学術研究に対する評価と支援などの諸条件が累積して可能となったものである。そしてこのような地理的・歴史的・学術的諸条件は、日本において台湾を研究する他の分野にもある程度は共通するものかもしれない。ただし、他者との直接的・対面的なコミュニケーションを研究方法の主軸に据える人類学において、他者との関係、距離はその研究・理解のあり方そのものに大きな影響を及ぼす。近年の日本の人類学における台湾研究については、この点からいくつかの指摘ができる。

また、日本において人文科学・社会科学の諸分野が台湾を研究する際、日本による台湾の植民地統治の歴史を振り返る作業をとまなうことは少なくないが、人類学におけるその傾向は、ここ四半世紀余りたいへん顕著である。そもそも欧米を中心に発展してきた人類学という学問自体が、1970年代以来植民地主義との関わりに大きな関心を寄せてきた。そして、そのような世界的な潮流を背景としながら、日本の人類学者、とりわけ日本の旧植民地をフィールドとする人類学者は、それぞれに日本において植民地主義を問うことの意味を考えてきた。近年このような問題意識から発した研究は多岐に及ぶ。

本稿では、日本の人類学におけるここ10年の台湾研究の動向を把握するため、少し年代をさかのぼって話を始めたい。まず第1節で1960年代から2008年頃までの研究の特徴について、10年前の三尾裕子による総括（三尾 2009）をも参照し、概述する。第2節でこの10年間の研究動向について振り返り論考する。第3節ではこれらを総括し、若干の展望を述べる。

なお、本稿はあくまでも現時点での筆者自身の問題関心にもとづいた回顧と展望である。そのため、ここ10年間の人類学分野における台湾研究を網羅的に取り上げて論じるものではない。内容には偏りもあることをご承知の上、どうかご寛恕願いたい³。

第1節 1960年代から2008年頃までの研究動向

1. 1960年代から1980年代まで

戦後日本の人類学において台湾研究が再開されたのは、1960年代以降のことである。まず、馬淵東一（1909-1988）や国分直一（1908-2005）ら、戦前台湾で調査研究に従事した経験のある研究者が台湾を再訪し、調査研究を再開した⁴。そしてこれとほぼ同時期に、戦前世代の薫陶を受けた戦後第1世代——末成道男、鈴木満男、松澤員子ら——が調査研究を開始し、その少し下の世代もこれに続いた。このころから1980年代までの日本の人類学による台湾研究、とりわけ原住民族研究は、戦前の研究蓄積を継承し、伝統的な社会と文化についてのより正確で詳細な記述を具現化すること、それをもとに対象社会・文化の本質的特徴をとらえようとするに多くの注意が向けられていた。漢人研究においても、台湾はしばしば中国大陸の漢人社会の「代替地」とみなされ、漢人の伝統的慣習や社会組織が探究された。人類学において、現地社会が急速な変化を経験しつつある時に、消えゆく社会・文化を書き留めようとするは正統かつ主流の営為であった。ただし台湾研究においては、その一方で、変化しつつあった側面についても少なからず書き留められた。伝統的な部分と変わりゆく部分、それらの記述の双方が、今日では重要な歴史の証言となっている。

2. 1980年代末から1990年代まで

1980年代末以降、日本植民地期に対する関心も高まる。その契機の一つは、かつて東京大学理学部人類学教室に所蔵され、後に同大学総合研究資料館（現総合研究博物館）に移管された鳥居龍蔵（1870-1953）撮影のガラス乾板写真の再生・保存・照合とデジタル化を目的とする研究プロジェクト（1988-1990）であった。このプロジェクトは、同教室出身の自然人類学者である香原志勢や赤澤威らが中心となり、広範囲にわたる鳥居の調査地をそれぞれ専門とする研究者により研究会が組織された。写真資料の過半を占める台湾関係の写真の整理と解析は、末成道男、土田滋、姫野翠、笠原政治が担当した⁵。100年の時を経て甦った鳥居の写真は、原住民族の画像記録の最早期のものに相当し、大きなインパクトと話題を呼んだ。日本国内のみならず台湾でも巡回展が行われ、図録となり、鳥居写真の存在は広く知られるところとなった。

それに続く1990年代半ば以降は、言語学者浅井恵倫（1894-1969）が1930年代に撮影した写真資料、伊能嘉矩（1867-1925）の郷里遠野に残されていた写真資料や伊能の言語調査資料が相次いで出版された（伊能 1998、笠原編 1995、日本順益台湾原住民研究会編 1999）。そして、それまで研究の全容が必ずしも明らかではなかった伊能嘉矩、森丑之助（1877-1926）の著作目録や評伝も著された。

浅井や伊能の写真集、伊能の言語調査資料の出版地がみな台湾であったことからわかるように、鳥居写真の研究に続いておこなわれた日本統治期の学術資料の整理と刊行、それにもとづく学史研究は、戒厳令解除後の台湾における台湾史の隆盛、社会的・学術的関心の高まりと連動して進められたといつてよい。とりわけ楊南郡を中心に台湾で進められた日本人研究者の著作の中国語

翻訳・研究と呼応し、日本と台湾の双方で資料整理と研究者の再評価が盛んになったという点は特筆に値しよう。

このような点からいえば、1990年代に行われた植民地期の学術資料の整理・研究は、先述したような世界的潮流としての人類学の植民地主義研究とはそもそも異なる背景・文脈から出発したものであったといえるかもしれない。ただし他方で、このような動きと同時期に、山路勝彦や馬淵悟、松澤員子らは、日本による原住民族統治にみられる植民地主義や植民地経験のあり方を論じている(山路 1991、1994、馬淵 1995、松澤 1999)。これらは、当時日本の人類学界で議論が盛んになりつつあった植民地主義研究の関心を色濃く反映しながら、各研究者が自身の調査地について論考したものであった。

3. 1990年代末から2008年頃まで——三尾論文を参考に

その後10年間の研究動向については、10年前におこなわれた台湾学会設立10周年のパネルにおける三尾による分析と評価(三尾 2009)を参照したい⁶。三尾は、1990年代末から2008年頃までの日本の人類学における台湾研究の動向を「日本統治期への関心」と「新しい研究の方向性」という2点に大きく分け、前者の「日本統治期への関心」をさらに3つの潮流に分けて説明した。

まず一つは、上述のように1990年代にはすでに着手されていた植民地期の研究資料の発掘と整理の進展である。具体的には、小川尚義(1869-1947)・浅井恵倫の台湾資料の整理研究、伊能嘉矩や森丑之助の著作の翻刻・復刻や評価、佐倉孫三(1861-1941)らの研究業績の発掘・整理と評価が進んだ。二つ目は、日本時代の研究に対する評価、とりわけ植民地統治と人類学との関わりについての研究が深まりをみせた。中生勝美編集の論文集や、山路勝彦の著書や編著書がその代表をなす。そして三つ目として、植野弘子・三尾裕子らを中心に、日本時代や「日本」に対する台湾の人々の歴史認識、あるいは「日本」を媒介とした台湾における文化構築についての研究が着手された。この三つ目の新たな研究潮流の基底にある問題意識について、三尾は以下のように記す(三尾 2009、60)。

植民地期の人類学を含む学術研究に対して(中略)検討を行うべきは、過去の遺産が、台湾の人々によってどのような過去として記憶され、またそれが個体から個体へ、世代から世代へと伝達されて共同化されているのかを問うことであろう。(中略)多様な市井の人々の経験、談話などをくみ上げることによって、知識人によって獲得されるヘゲモニーを相対化し、当事者たちの社会文化の多様なリアリティの全体像を明らかにすることも人類学が求める研究のあり方であろう。

つまり、人類学による植民地主義研究は、過去の事実を明らかにするのみならず、その過去が現在を生きる人々にとってどのような意味をもつのかを当事者の視点から問うべきだという指摘である。この問題意識は、台湾を研究する日本の少なからぬ人類学者に今日まで継承されている。

詳細については、次節で述べたい。

もう一つの「新しい研究の方向性」とは「政治運動とも結びつく」ような「現代の社会問題への関心」であり、その具体例として原住民族の権利回復運動や土地問題に関する石垣直や宮岡の研究が挙げられた（三尾 2009, 61）。

このように三尾が大きく二つに分類した研究動向は、その後の10年間で合流し、大きな一つの流れを形成することになったと筆者は考えている。以下述べたい。

第2節 この10年の研究動向

1. この10年の研究に関するいくつかの指摘

日本の人類学におけるこの10年の台湾研究の動向については、すでにいくつかの興味深い指摘がなされている。まず、石垣の著作（石垣 2011）の書評で山路勝彦は、1960年代から石垣の著作刊行に至る半世紀間にほぼ10年周期で出版されてきた日本の人類学による原住民族研究の単著から読み取れる研究動向を、以下のように記す（山路 2013, 424）。

親族組織や宗教などの伝統文化の調査・研究から、認同（アイデンティティ）意識に焦点を合わせた研究へと力点が移動してきた動向が窺える。近年の傾向では、より政治学的な文脈で現地文化を理解しようとする傾向が強まった（後略）。

この山路の指摘は、日本の人類学による台湾研究が、静態的研究から動態的研究へ、あるいは社会構造や理念の抽出・記述に重点を置いた研究から当事者の主観的意識や実践およびそれを取りまく政治力学に注目した研究へと、研究関心を変化させてきたことを言い表したものと理解できる。このような変化は、ここ30年ほどの日本の人類学全体にみられる趨勢ではあるが、台湾研究にもこの傾向が明確に現れているのだと理解できる。

また野林厚志は、原住民研究会がその助成母体である順益台湾原住民博物館の開館20周年を記念して刊行した論文集において、主編者として序文で以下のように記した（野林 2014a, 5）。

今や、原住民族の研究を大学や研究機関の研究者が特権的に取り組む状況はない。日本での研究成果や出版物、博物館の展示は、瞬く間に台湾につたわり、原住民族自身も含めた台湾学界の評価にさらされる。研究者が単なる興味で調査や研究をするという時代から、研究成果が当事者にとってどのような意味や意義をもつのかということがあらためて問い直されている。そして、論戦のアリーナはつねに我々のそばに迫っている。

これは本稿冒頭でも述べた、研究者と研究対象との距離、関係性についての指摘である。

このような研究環境と問題意識を背景としながら、今世紀に入り人類学における学史研究と植民地研究はさらに進展した。それらの研究にも上記山路の指摘、「より政治学的な文脈で現地文

化を理解しようとする傾向」はあてはまる。すなわち、近年の台湾を対象とする日本における人類学的な学史研究・植民地研究は、その背後にある植民地主義の指摘や批判にとどまるものではなく、むしろ、過去の学術研究の成果や当時の統治システムが現在の当事者社会やそれをとりまく政策にどのような影響をもたらしているのか、また当事者がそれらの学術研究成果や統治システムの残存物をどのように評価したり活用したり批判したりしているのか、さらには過去の日本による植民地統治の経験や記憶を今日の台湾社会に生きる人々がどのようにとらえ利用しているのか、またその背後にある政治・経済的要因など、現在の関心の比重が圧倒的に大きい。

その意味で、2000年代後半から今日までの人類学研究においては、10年前に三尾が二分して挙げた「日本統治期への関心」／「現代の社会問題への関心」という二つの研究潮流は、必ずしも切り離されて別々に行われてきたとはいえない。むしろ、現代の社会問題を過去——とりわけ日本統治期との関わりにおいてとらえようとする問題意識が強く働いている。すなわち、過去の事象は何らかの形で現在と連なり、現在の事象は過去との関係性のなかに存在する、という視点に立つものが主流である。これらの研究傾向は、過去から現在までの連続性／不連続性への関心、過去と現在との接合・往還の試み、とも表現できるであろう。

加えて、若林が石垣著作の書評で指摘した「再帰性とグローバリティの自覚」という特徴も、石垣以外の近年の人類学研究の多くにあてはまるものといえるだろう（若林 2012、156）。これについては次節で詳しく述べたい。

以下、これらのことを念頭に、個別の研究について概観する。

2. この10年の課題領域

日本の人類学において2000年代末から今日までに行われた台湾研究には、従来から行われてきた研究を継続・発展させたものもあれば、新たに取り組みられるようになったものもある。以下では、大きく6つの課題領域に大別し、それぞれ述べていきたい。(1)から(3)の項は原住民族研究に顕著にみられる課題、(4)と(5)は漢人研究を中心とし、原住民族研究をも巻き込みながら進められてきた課題である。(6)はどちらにもみられる課題である。

(1) 学史および学史とエスニシティとの関係

90年代末以降の10年間で日本統治期の研究資料の整理や研究者の評価が進んだこと、人類学と植民地主義との関わりを問う研究が進んだことは上述した。それに対してこの10年は、学史研究がさらに深まる。とりわけ原住民族研究において、個別の研究者の研究業績や研究課題について、詳細な再検討が進められた。

まず、馬淵東一の研究業績の再評価である。馬淵の研究は、従来人類学の学説や理論研究上で重要な位置を占め、かつ原住民族社会についての基本的な認識枠組みを提供するものとして、戦後の日本と台湾の人類学界でしばしば参照されてきた。近年、その学術的価値が再び見直される契機となったのは、2009年に国立政治大学原住民族研究センターの主催により台東の国立台湾史前文化博物館で開催された「第2回日台原住民族研究フォーラム」である。同フォーラムは、「馬

淵東一の学問と台湾原住民族研究」を主題とし、当時『台湾高砂族系統所属の研究』の翻訳を手がけていた楊南郡による講演、原住民族の若い世代の研究者による発表も行われ、馬淵の研究成果が、原住民族の若い世代に読まれ検討される時代になったことを示すものであった⁷。このような機運を受けて、日本では同フォーラムに登壇した日本側研究者の論文を中心に馬淵の研究を再検討・再評価する9篇を収めた論文集が刊行された（笠原編 2010）。加えて、馬淵の原住民族研究が今日の原住民族の権利回復運動にどのように参照されているのかも論じられた（宮岡 2011）。馬淵の研究全体の再評価も行われている（山路 2011b）。また馬淵以外の研究者の再検討としては、西村一之が佐倉孫三と「理蕃」との関わりについて論考している（西村 2014）。

学史研究はまた、今日の原住民族のエスニシティとの関係という側面からも進められた。笠原政治は、近年一貫して過去の原住民族の命名・分類方法について研究の年代・主体別に資料を再検討し、その背後にある他者認識や知識の系譜、矛盾点を具体的かつ詳細に論じている（笠原 2012、2013、2014a、2014b、2015、2016、2017）。これらの研究は、過去の研究者による原住民族の命名や分類が今日の当事者のアイデンティティに多大な影響を及ぼしている、という認識にもとづいている。そのほか、過去の民族分類と今日の民族分類や「正名運動」との関係性なども議論された（野林・宮岡 2009、宮岡 2015）。

さらに、原住民族研究の枠組みには収まらないが、台湾研究を視野に収めた人類学者による学史研究として、以下2点挙げておきたい。一つは泉水英計によるG. H. カーに関する研究である。カーの沖縄史研究と台湾史研究がどのような連続性／非連続性をもち、そこで沖縄の人々、台湾の人々がどのように認識されたのか、そのカーの歴史観は沖縄や台湾にとっていかなる意味をもつかが論じられた（泉水 2010、2012）。もう一つは中生勝美の博士論文をもとにした著作である（中生 2016）。同書は、20世紀前半に日本の植民地や占領地で行われた日本の人類学的研究の歴史について、関係者へのインタビューなどを交え、領土拡張政策や軍部との関係から詳細に検討し、帝国日本の学知について論じた労作である。このなかで台湾研究については第1章で台湾総督府臨時台湾旧慣調査会と台北帝国大学土俗・人種学研究室による研究が取り上げられている。日本統治期の人類学的台湾研究が他地域との比較的視野のなかで論じられたことの意義は大きい。

(2) 物質文化、工芸、生業

原住民族研究においては、物質文化、工芸、生業に関する研究も進んだ。

野林は、日本の博物館などに収蔵される原住民族の物質文化資料について、収集史、今日の文化資源としての価値、エスニシティとの関わりなど、多様な観点から論じている（野林 2010、2013、2014b）。角南は、山刀についての研究史をまとめ、また日本各地の博物館・資料館に収蔵される原住民族資料について広範な調査を実施し、その成果を報告している（角南 2014、2016）。

今日の原住民族の工芸に関しては、生産現場における漢人を含めた多民族状況（野林 2009、2012）、「工作室」のオーナーが政府の支援や外部の協力者や買い手などの複数の関係性とネッ

トワークのなかで「作者」となる過程や、外来技術の導入の経緯（田本 2012、2015）などが論じられた。これらの研究により、今日「原住民族の工芸」とみなされるものが、原住民族のみに担われ占有される領域として存在しているわけではなく、むしろ台湾という大きな社会環境のなかで多様なアクターの関係性とネットワークのなかで生成しているという状況が明らかにされた。

これらに加えて、原住民族の狩猟、アワ栽培といった伝統的生業の今日的あり方についても論じられ、それが原住民族の文化的象徴、伝統として扱われ、文化復興の動きのなかに位置づけられている状況が明らかにされた（野林 2011、林 2013）。

人類学において、物質文化や生業という主題は、古典的で静態的なものとみなされてきた。しかし今日の原住民族社会においてこれらの位置はきわめて動的である。収蔵されて久しい博物館資料は、現在では原住民族の重要な文化資源とみなされる。上述の研究は、過去のコレクションに関するもの、現在の状況を論じたものなど多様であるが、いずれも、今日の原住民族のエスニシティやアイデンティティとの関係を視野に入れてなされたものであるという点は共通している。その意味では、上記（1）にも関連する研究だといえる。

(3) 歴史民族誌、歴史人類学

原住民族研究においても一つ進展した領域として、歴史民族誌・歴史人類学的な研究が挙げられる。

山路は30年以上にわたる台湾研究の集大成として、タイヤルの近現代史を慣習法ガガに支えられた時代から今日の文化復興に至るまでの約100年の時間幅でとらえた歴史民族誌を世に問うた（山路 2011a）。折しもその翌年には、台湾で黄應貴によるブヌンの歴史民族誌3部作が出版された（黄應貴 2012）。両者は、原住民族の近現代史とその過程での文化の変容と復興について知り考えるために、今後永く読まれる著作となろう。

また松岡は、博士論文を改稿し、原住民族の国家への包摂過程を「地方化」という概念でとらえ、戦前と戦後の政策の連続性／非連続性を論じる著作を刊行した（松岡 2012）。政策史研究の側面が強いが、パイワンやルカイの村落でのフィールドワークをもとに、当事者の視点からその歴史をとらえ直すことにも成功している。同書は歴史学などでも高く評価され、先ごろ台湾でも翻訳出版され、原住民族知識人の間で大きな話題を呼んだと聞く。松岡はその後、国家が原住民族を可視化するために利用した戸籍、身分、名前登録などの制度の変遷についてもさらに詳細に検討し、原住民族を取り巻く諸制度の意味について問い続けている（松岡 2014、2015、野林・松岡編 2019）。

1990年代より公開された鳥居龍蔵と浅井恵倫の写真資料をもとに平埔族の歴史と文化を論じた清水純による研究も、歴史民族誌として挙げられる（清水 2014）。この著作については別稿（宮岡 2017）で論じたため多くは繰り返さないが、過去の写真の研究資料としての価値を示し、平埔族の歴史過程の一端を明らかにし、今日の原住民族の文化復興にも貢献しようとした意義はたいへん大きい。なお、この清水著作と同様に写真や図像を主な研究資料に用いた研究として、原

住民族のタバコ文化についての論文（原 2014）、明治初期の〈牡丹社事件〉の表象についての研究（山本 2014）も挙げておきたい。これらの動向は、原住民族研究における研究資料の広がりを示すものとしても理解できる。

また、三尾が10年前に「新しい研究」の担い手として挙げた石垣直は、ブヌンによる土地問題と権利回復運動の実態を自身の調査資料から詳細に論じた博士論文を改稿し、2011年に刊行した（石垣 2011）。扱われる事象は今世紀初頭の民進党政権下での動向が主であるが、それらが「歴史をもつれあい」の結果としてあることを豊富な調査資料と精緻な記述により読者に理解させる。原住民族の今日の土地問題や権利回復運動について、台湾の政治状況や世界的先住民運動との関係性のなかに位置づけて論じた意義は大きい。

加えて、恒春地方パイワンの首長制における贈与交換形態の近代における変容を論じた紙村の研究（紙村 2014）、尤驍によるルカイの首長の権威の変容と今日における再構築に関する研究（尤 2019）も歴史人類学的研究として記しておきたい。

さらに原住民族研究ではないが、木村自の著作をここに挙げておく（木村 2016）。19世紀末、清朝との衝突によりミャンマーへ移住した雲南ムスリムが、その後タイや台湾各地へと至った過程の歴史民族誌であり、雲南ムスリム・ディアスポラの多現場民族誌である。

（4）植民地期の経験・記憶

上記3点がおもに原住民族研究の動向であったのに対し、三尾裕子や植野弘子を中心にその枠組みを越えて行われてきたのが、日本による植民地統治の経験・記憶にかかわる研究である。まず、2006年に刊行された論文集（五十嵐・三尾編 2006）と学術誌の特集（三尾編 2006）に続き、2011年に第3部となる論文集『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶——』が出版された（植野・三尾編 2011）。扱われた主題は、台北市の古蹟指定（上水流久彦）、台北故宮博物院にみる「中華」（松金公正）、日本人漁民の移動と技術（西村）、高等女学校教育と生活慣習（植野）、日本語世代の語りにおける「日本」（五十嵐真子）、サイシャットの抗日リーダーの対日認識（未成）、警察官用原住民語教科書における原住民観（三尾）、日本による原住民族の旧慣否定（笠原）と多岐にわたる⁸。前2部に比して原住民族にかかわる論文が増えたこととも関わり、日本によって台湾に導入された「近代」の諸相がより多角的に検討された。また、台湾における「中華」概念についても上水流や松金により議論された。編者の植野は、同書の序文でこれら台湾における「近代」や「中華」という課題をさらに検討する必要性を記したが、その後、それは他地域との比較研究という形で探究される。

すなわち、台湾と旧南洋群島は、両地域の住民の多くが日本による植民地化以前に別の文明に接触し支配されていたという共通性、戦後に新たな外来権力により「脱植民地化の代行」がなされた（若林 2007）という共通性、この2点を念頭に、両地域の植民地経験や戦後の脱植民地化、またそれらの記憶のあり方を比較考察するという共同研究である⁹。その成果は、論文集（三尾・遠藤・植野編 2016）と学術誌の特集（三尾編 2016）として刊行された。どちらも序論は三尾による。両論集所収の各論の主題は、台湾をおもに論じた研究に限っても、日本仏教布教の方途

としての社会事業（松金）、領台初期の日本語－台湾語教科書の編纂（林虹瑛）、生活世界の「日本化」の実相およびその旧南洋群島との比較（植野）、プロテスタント系日本語教会による高齢者ケアにおける社会空間のありよう（藤野陽平）、原住民族ブヌンの植民地経験と世代ごとの対「台湾」「日本」「中国」認識（石垣）、日本統治期の建築物の古蹟化や利活用にもみる「日本」のもつ意味（上水流）、日本統治期と戦後台湾を「跨ぐ世代」の経験と生き方（西村）、〈牡丹社事件〉の記憶の場（宮岡）と非常に多岐にわたる¹⁰。

また、これらの共同研究とは別だが、宮崎聖子は青年、陸軍士官学校、出征、保育などを主題として日本による統治経験を諸個人のライフヒストリーから探る研究を継続的におこなっている（宮崎 2008、2011、2013 など）。上述の西村論文における〈跨ぐ世代〉の語りと宮崎の記述・分析する人々の生き方には、共通点も少なくない。このような研究蓄積は、台湾の人びとの植民地経験についての多角的理解を確実にうながすものである。

上述の論文集（三尾・遠藤・植野編 2016）のなかで最も積極的に他地域との比較を試みた上水流は、現在の台湾における日本統治期の建築物のあり方について、日本という出自を肯定的に評価し他者との差異化を図る目的で利活用する「内部化」、日本という出自をものは気にすることなく消費文化のなかで利活用する「溶解化」という二つのあり方が、韓国や旧南洋群島ではみられないものだと分析する。そして、台湾にこれが成立した要因について台湾の政治的・経済的・文化的脈絡から論じた。上水流はこのような比較研究により、「植民地支配の問題を別の領域に開き、植民地支配の強力な規定力を脱構築する」ことが可能になるのだと説く（上水流 2016、283）。

繰り返しになるが、この10年に行われた以上の植民地期の経験・記憶に関する人類学研究において、多くの論文が今日の台湾の人々の生活や意識や記憶に焦点を当てた。そして今日の台湾における「日本」がもつ意味を過剰に読み込むことを慎重に避けながら、台湾の人びとの生のリアリティに迫ろうとした。それゆえに、都市部を中心に日本統治期の建築物にもはや「日本」の意味が見出されていないという指摘（上水流）、ブヌンの若い世代にとっての日本は「もはや否応なしに意識せざるを得ない存在ではない」という分析（石垣）、日本語教会による高齢者ケアの場が「中間性をそのまま受け入れるような社会的空間」であるという見方（藤野）、原住民族にとって日本の植民地主義に起源をもつモニュメントや制度の一部は、いまだに克服すべき・乗り越えるべき対象としてとらえられているという指摘（宮岡）など、それぞれに大きく異なるリアリティが浮き彫りにされた。それはそのまま、台湾の歴史的・民族的・文化的な多様性・複雑性を反映しているといえる。しかしまた、それらについて個々の文脈でより詳細に論じられるようになったこと自体が、今世紀初頭から継続的に取り組まれてきた一連の研究の成果ともいえるだろう。

さらに、台湾の人びとの経験や記憶のみならず、それを論じる日本の研究者のポジショナリティ positionality をも議論の中心に据えて行われた研究にも言及しておきたい。

中村平は、原住民族タイヤル村落での調査をもとに、日本による植民地統治および原住民族と日本人の脱植民地化について多くの著作で論じてきた。中村によれば、タイヤルの老人が日本人

である中村に対して被植民の暴力の記憶を語る行為のなかで、語り手は行為遂行性 *performativity* を構築すると同時に、聞き手と（その民族誌的記述の）読み手はその暴力の記憶を分有し、脱植民化のコンタクト・ゾーンに身を置く。このような記憶の分有は「脱植民化運動の始まりの契機である」という（中村 2013、49）。そして「植民統治への応答責任は、分有行為が生みだす、既存の主体を解体し続ける者たちが取り続けていく」のであり、「ナショナルな主体が取りきれものではない」と論じる（中村 2013、50）。中村はこれらの議論を柱とした博士論文を先頃著作として刊行し、また日本統治期の原住民族の土地囲い込みについても別に論じている（中村 2018a、2018b）。

沼崎一郎は、「筆者を含め、台湾をフィールドとする「日本人」人類学者は、日本のポストインペリアル状況も、自身のポストインペリアルリティも、明瞭に対象化できずにいる」ことを問題視する（沼崎 2016、373）。そして、戦後の日本が帝国という過去を幻想化し忘却してきたことを喚起し、「台湾人」による日本文化／日本人論の読解を手がかりに、「戦後」日本におけるアンチ・インペリアルイズムの最大の難点は、論者の立場が外在的で超越的であること」だと論じた（沼崎 2016、393）。沼崎はその後も、近年の日本統治期を舞台とした台湾映画を手がかりに、自身のポストインペリアルリティについて考察を続けている（沼崎 2017、2018）。

（5） 境域・越境、周辺地域との比較

以上の3領域が従前からの研究の延長線上におこなわれてきたものであるのに対して、この10年で新たに取られるようになった研究課題が、境域、越境である。

植野は、「境域」という概念について「単に地理的に境を接する場というだけではなく、異なる集団の人々が関係を持ち続ける相互交渉の場を意味している」と規定する。そして、台湾の境域を論じる課題は、①境域と国家との関係②境域における他者認識、自己認識③境域の広がりとその変容、の3点であるとまとめた（植野 2011、1-2）。この問題意識をもとになされた研究として、まず学術誌の特集「台湾をめぐる境域」（植野編 2011）がある。続いて、八重山と台湾および対馬と韓国の過去から現在までの越境や交流を比較的視座から考察する共同研究により論文集（上水流・村上・西村編 2017）が刊行された¹¹。また帝国日本におけるモノと人の移動に関する台湾・沖縄・韓国の比較研究も行われ、先頃学術誌の特集号でその成果が刊行された（植野編 2018）¹²。そして、上記以外の場でも少なからぬ論文が著されている。

それらのうち台湾研究にかかわる個別テーマを概観すれば、八重山－台湾間の人的交流の対馬－韓国間の交流との比較検討（上水流）、台湾に暮らした沖縄移民の経験と記憶（松田ヒロ子、松田 2013、2016 など）、八重山・宮古の人々の台湾経験の記憶（松田良孝）、石垣島の台湾華僑の経験と宗教的実践（森田真也、森田 2013）、（牡丹社事件）の再解釈と資源化（宮岡）、台湾東海岸の漁民と沖縄漁民および台湾漁民と大陸漁民の往来と交流（西村）、外国籍配偶者（横田祥子、横田 2008、2014、2016a）など非常に多様である¹³。

これらの研究の多くは、かつて帝国日本の範域で人々が往来した時代の経験や記憶を今日の国境周辺地域に住む人々がどのように認識し、あるいはその経験や記憶をどのように資源化して利

用しようとしているか、を問うている。その意味では前項で述べた植民地期の経験・記憶に関する研究とも通底する問題意識を有して行われたものである。

他方、西村による大陸漁民と台湾漁民との往来・交流の研究、横田による外国籍配偶者に関する研究は、近年の新たな社会現象としての人の移動に関する研究として注目される。

(6) 宗教

この10年間は、多様な観点からの宗教研究も大きく進展した。

山田仁史は、かつてアジア・オセアニアを中心に広くみられた首狩りという文化的・宗教的慣行についての記録・文献を渉猟し、宗教民族学的観点から論じる著作を刊行した(山田 2015)。いうまでもなく首狩りは、台湾において消滅して久しく、またその記憶・伝承自体も消失傾向にある。しかし、原住民族の基層文化においてこの慣行が占める位置は非常に重要であるし、また原住民族の近代史においてこの慣行の存在の影響はたいへんに大きかった。そのような観点からいっても、首狩りの宗教的・文化的な意味が正面から論じられたことは画期的であり、意義深い。首狩りと大きくかかわる鳥占いなどの研究も進む(山田 2014、蛸島 2015、2019)。今後もこの分野の議論が進展することを期待したい。

漢人の民間信仰については、三尾らによる日本人を神に祀る信仰の研究を挙げられる。台湾において「日本神」の事例は41カ所確認でき、とくに南西部に多いという。三尾は、台湾の人びとにとって「日本神」祭祀は、植民地の暴力的支配や戦争にかかわる忌避すべき社会的記憶を、日本に由来するとされる靈魂を慰撫し祭祀するという宗教的実践を通じて、徐々に人々が「飼いならす」行為なのだと論じた(三尾 2017)。また、日本の軍人・植民地行政官であった田中綱常(1842-1903)の祭祀・信仰について論じた林・三尾・劉は、田中の依り代となって廟を建てた宮主やその関係者が、台湾における国家史に追隨したり対抗したりするのではなく、日々の経験のなかで得られた情報をブリコラージュ的につなぎ合わせて田中の事蹟や信仰の由縁を再構成してきたさまを「民衆史学」と呼んだ。そしてこの民衆史学により、田中の子孫をはじめとする日本との多様な信仰上の交流が生みだされているという意義を指摘した(林・三尾・劉 2017)。これら「日本神」信仰の研究は、旧統治者を旧被統治者が神として祀るという一見不可解にも思える現象に対し、植民地主義との関係を視野に入れ、台湾漢人の日常的世界の視点から考察したものである。ゆえに、(4)の植民地経験・記憶にも連なる研究であることを言い添えておく。

他方、藤野は博士論文をもとに、台湾の民衆キリスト教(具体的にはペンテコスト派キリスト教である真耶蘇教)の宗教人類学的研究の著作を刊行した(藤野 2013)。従来日本の人類学において台湾漢人の民間信仰や仏教信仰については少なからず論じられてきたものの、キリスト教研究は皆無であったという。藤野は、台湾におけるキリスト教を「癒しの実践を中心とした民俗宗教」としてとらえ、台南での調査で収集された信者の語りを主な手がかりに当事者の視点から考察した。東アジアでの比較研究も展望されている。

また同じくキリスト教研究として、岡田紅理子による都市に居住する原住民族アミのカトリック教会活動に焦点を当てた一連の研究も挙げられる(岡田 2012、2013、2015)。

第3節 総括と展望

1. 今日の日本の人類学における台湾研究の特徴

以上の研究回顧から、今日の日本の人類学における台湾研究の特徴について4点にまとめてみたい。

まず1点目は、歴史、とりわけ近代植民地史に対する関心が高いことが指摘できる。既述のようにこれは従前の研究関心を継承している。そしてまた、日本植民地期と戦後との連続性／不連続性を問おうとする視点も、上述した歴史民族誌、植民地期の経験・記憶、境域・越境など、それぞれ異なる課題領域のなかに少なからぬ研究に共通してみられる。これは、歴史を問う際にも現在の視点を重視する人類学ゆえの特徴ともいえるだろう。

2点目は、帝国日本の範域を枠組みとして、他地域、具体的には旧南洋群島、韓国、沖縄などとの比較を行おうとする視座である。これは前節に述べた植民地期の経験・記憶に関する研究、境域・越境の研究においてとくに顕著にみられた特徴である。帝国日本にかかわる歴史経験・記憶およびそれに対する認識について、これらの地域を専門とする研究者との共同研究もふまえながら、地域ごとの共通点と相違点を見出すことが試みられたのであり、上述のようにそれはある程度達成され、一定の成果を出してきた。

3点目は、おもに原住民族研究についてだが、若林が指摘したように、再帰性 *reflexivity* についての自覚を挙げられよう。若林はこの点を以下のように説明する（若林 2012、156）。

人類学者たちがその「伝統社会」の構築を試みて接触していた時にも、先住民族社会は近代の国家との相互作用関係のなかにあった。現代の先住民族運動ではそれまでに摂取された近代的観念が動員されるとともに、かつて彼らとの相互作用によって築かれた近代学知としての人類学的研究の成果も利用されており、その姿をまた現代の人類学者が、先住民族社会・個人との不可避の相互作用のなかで観察している。研究者は、こうした「歴史的もつれあい」と現代的な政治・社会的コンテクストの磁場の中に研究対象の先住民族とともにあることに自覚的たるべし、とするものである。

笠原による学史研究、清水による過去の写真資料を用いた平埔族の歴史・文化研究をはじめとし、今日の原住民族研究の多くは、いずれ自身の研究を、当事者たちがアイデンティティの確認や文化復興の場面で参照する可能性もあるということを頭の片隅におきながら行われている。そしてまた、被植民の暴力の記憶が語り手と聞き手と読み手の間で分有されることの意義を論じる中村の研究でも再帰性についての自覚は確認できる。この特徴は、若林がいうように一方で今日の世界的な人類学の思潮が導くものであるのだが、他方では半世紀続いた日本による台湾統治、19世紀末以来の日本における原住民族研究の蓄積とそれが当事者たちに与えてきた影響、そして今日の台湾社会と密接にかかわる自身の研究環境に対する自覚が導いていることでもある。

最後に4点目として、上記3点目ともかかわるが、現地社会への直接的／間接的還元という志

向性を挙げられよう。原住民族研究の学史や物質文化（とくに博物館資料）の研究がわかりやすい例ではあるが、この特徴は原住民族研究に限られることではない。たとえば、植民地期の経験・記憶にかかわる研究、あるいは「日本神」信仰の研究などは、日本社会に流布する「親日」などの短絡的印象・表象には回収し得ない台湾の人びとの経験や意識について、実証的に明らかにしようとするものである。境域・越境の研究においても、たとえば八重山と台湾との観光を媒介とした交流における相互の誤解やすれ違いを指摘する背景には、両者のよりよい交流と理解のあり方を促進しようとする意図が存在する。このような現地社会への還元の志向性は、日本と台湾との地理的、歴史的、文化的な近接性と大きく関わっていると思われる。また、人類学の研究が現地の人びととの直接的・対面的な関係によって成立するものであることとも関係していよう。

2. 10年前の三尾による「期待」と比較して

10年前の記念パネルで、三尾は「今後研究が進展することを期待する研究テーマ」として、(1) 都市研究、(2) 台湾人のトランスナショナリズムあるいはグローバル化研究、(3) 外国籍の労働力や配偶者など台湾へ入ってくる方向でのグローバル化、という3点を挙げた。これがどのように進展したか／しなかったかについて、以下簡単に触れておきたい。

まず、(1)の都市研究については、一部進展したといえる。原住民族研究は長らく「原郷」と呼ばれる伝統的村落をフィールドとして行われるものがほとんどであった。近年、上述のように岡田による都市居住の原住民族アミの研究が現れたことは特筆に値する。加えて、横田の研究は、地方都市における漢人社会の変容、とくに外国籍配偶者、高齢者ケア（横田 2011）などに焦点を当てており、これも都市研究として理解することができるだろう。さらに加えて、上水流による台湾の本土化以後の外省人アイデンティティ、中華民国の台湾化における金門の位置づけについての論考もここで挙げておきたい（上水流 2012、2017）。これらは「都市研究」の範疇には入りにくい、人類学が従来典型的なフィールドとしてきた村落社会、台湾に長く居住してきた閩南系／客家系の漢人社会や原住民族社会以外のコミュニティに焦点を当てた研究として注目できよう。

(2)の台湾人のトランスナショナリズムあるいはグローバル化研究だが、三尾が例示したような海外居住台湾人ネットワークなどの研究については、管見の限り進展しなかった。ただし上水流は、台湾と八重山との間での過去の往来経験の記憶と現代の観光を主題として国境や国民意識のもつ拘束性について論じ、トランスナショナリズム論を再考した（上水流 2011）。

(3)台湾へ入ってくる方向でのグローバル化、外国籍労働力・配偶者については、前述の横田により研究が進められた。横田は近年、台湾への移民を送り出してきたインドネシア西カリマンタン州の華人社会での調査研究にも取り組んでいる（横田 2016b）。加えて沼崎は、新移民の存在を踏まえ、1990年代以降の台湾のエスニシティと社会階層の変動について論じた（沼崎 2012、2014）。

三尾の挙げたこれら3点は、どちらかといえば従来社会学が得意としてきた分野である。台湾の人びとのグローバルな展開についての研究がそれほど多くない理由には、日本という地理的・

歴史的立場を活かしにくいという制約も背景にはあるかもしれない。ただし、上水流や横田のような研究の広がりもみられる。今後のさらなる研究の進展を期待したい。

3. 今後の研究に対する期待と展望

最後に、今後の研究に対して筆者が目下抱く期待と展望を、簡単に述べておきたい。

まず原住民族研究についてだが、蔡英文政権下で原住民族をめぐる政治状況・諸制度は変化の只中にある。平埔族の社会的・制度的承認の行方なども含め、今後も注視を続ける必要があるし、この方面の研究が進むことを期待する。また、台湾において過去の博物館資料や画像資料などの学術研究成果は今日デジタル化が進み、利用がより容易になった。博物館や大学などの研究機関と原住民族村落との協働による展示や研究も盛んになりつつある。そのようななかで、原住民族の人々がそのような過去の学術研究成果をどのようにとらえどのように利用しているかについても、引き続き注意が払われるべきであろう。あわせて、日本に収蔵されまだ十分には整理や研究のなされていない原住民族関係諸資料についても、今後研究が進み、原住民族の人々により利用しやすい形となることを期待したい。

次に、すでに進められてきた境域研究について、とりわけ植野が3区分したうちの「③境域の広がりとその変容」研究の深化を期待する。具体的には、「新移民」と呼ばれる人々とその子ども世代について、上述の横田のような台湾外への研究の広がりとともに、台湾内におけるミクロな視点からの人類学的研究が進められることを期待したい。上記の原住民族をめぐる状況の変化と合わせて、多元性を増す台湾社会・文化のあり方を人類学的視点から調査研究することが求められている。

また、戦前と戦後の連続性／不連続性について、より人類学的視点に沿った現代史の実証的研究の進展が望まれる。戦後の経験について語ることは長らくタブーだったこともあり、研究の蓄積は少ない。国民党による政策下、そして高度経済成長などの大きな社会変化のもとで、台湾の市井の人々の日常生活はどのように紡がれ、どのような実践や交渉が繰り返り広げられたのか。今後この方面の研究が進むことを期待したい。

おわりに

2018年3月、台北の国立台湾大学附属図書館で、「重返・田野——伊能嘉矩與台湾文化再発見」と題する、伊能嘉矩の台湾研究を主題とした特別展示を見学した¹⁴。「重返・田野」とは、「フィールドへ繰り返し戻る」というような意味合いをもち、伊能という人物および伊能ののこした台湾研究の成果が繰り返し台湾というフィールドで思い起こされ、参照され、批判され、研究され、あるいは新たに表象される、という現象を表している。若林のいう「再帰性」を伊能自身が自覚していたかどうかはわからない。しかし伊能の研究は、100年以上の時を経た今日の台湾で、新たな研究や表象や原住民族自身による文化復興を生むという、再帰的現象をもたらした。

筆者自身の研究を振り返れば、それが伊能の研究のように後世の台湾に「繰り返し戻る」こと

は今のところたいへん考えづらい。しかし、その可能性を否定することもまた無責任なように思う。やはり再帰性への自覚をもちつつ、今後も意義のある研究を模索すべきなのであろう。日本で台湾を研究する多くの人類学者は、それを自身の研究の前面に提示するかどうかは別として、おそらく同じような心持ちであることと思う。

今後も、再帰的な場において、より多くの実りある研究が生み出されていくことを期待し、また、そこに自分も参与できるよう努力したい。

注

- 1 本稿では、「人類学」という語を、文化人類学・社会人類学・民族学の総称として用いることとし、形質人類学・自然人類学の立場による研究成果は含めない。
- 2 同研究会の発足の経緯や今日に至る活動の概要については(笠原 2006、清水 2016、末成 2016)などを参照。
- 3 本稿で日本の人類学におけるこの10年の台湾研究として扱う業績は、おおむね2008年以降に刊行された日本を活動拠点とする研究者の論文と著作に限定する。
- 4 本稿では、1945年以前の研究業績を有し、すでに物故した人物にのみ生没年を付記する。
- 5 この研究プロジェクトの発足経緯は(鳥居龍蔵写真資料研究会編 1990、末成 2016)を参照。なお、鳥居龍蔵研究会・東京大学総合博物館によるウェブサイト「民族学フィールドワークの先覚者 鳥居龍蔵とその世界」でもその研究成果の一部を閲覧することができる。また、鳥居撮影の写真資料の全体は、東京大学総合博物館のウェブサイト上の「東アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース」において検索・閲覧できる。
- 6 この年代の主要研究業績についての書誌情報は、紙幅の関係上、本稿では省略する。詳細は(三尾 2009)を参照。
- 7 このフォーラムの詳細は(笠原 2010) および国立政治大学原住民族研究センター発行の雑誌『原教界』2009年12月第30期の特集「馬淵東一其人及其学問」を参照。なお、楊南郡は、『台湾高砂族系統所属の研究』の翻訳刊行後、馬淵の主要論文を別途翻訳刊行した(台北帝国大学・土俗人種学研究室 2011、馬淵 2014)。また中央研究院民族学研究所でも『馬淵東一著作集』全4巻の翻訳刊行が進行中である(馬淵 2017)。
- 8 ここで言及する論集に収録された論文の各書誌情報は膨大になるため、基本的に本稿では省略する。なお、ここでは必ずしも人類学を専門としない著者の論文も含めて列挙した。
- 9 科学研究費補助金 基盤研究(A)「日本を含む外来権力の重層下で形成される歴史認識：台湾と旧南洋群島の人類学的比較」(2010-2014年度、代表者：三尾裕子、課題番号22251012)。
- 10 同注8。なお、前者の論文集については、黒崎が旧南洋群島との比較の視点から著した書評が参考になろう(黒崎 2017)。
- 11 科学研究費補助金 基盤研究(B)「日本「周辺」地域にみる国境変動とアイデンティティ：韓国・台湾との越境を巡って」(2009-2011年度、代表者：上水流久彦、課題番号21320165)。
- 12 科学研究費補助金 基盤研究(A)「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究：台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」(2013-2016年度、代表者：植野弘子、課題番号25244044)。
- 13 同注8。なお、括弧内で姓と出版年を併記したものは、前掲の3つの論集以外の研究業績を示す。
- 14 会期は2018年3月8日～5月6日、文化部指導、主催は国立台湾大学図書館・同人類学系及人類学博物館・同原住民族研究中心・原住民族委員会台湾原住民族図書館資訊中心による。展示顧問は胡家瑜、展示策定は陳偉智が務めた。同展の趣旨や展示構成、展示資料などは、インターネットの特設ウェブサイトでもみることができる。また、別稿でも紹介した(宮岡 2019)。

参考文献

- 藤野陽平 (2013) 『台湾における民衆キリスト教の人類学——社会的文脈と癒しの実践——』 風響社。
- 原英子 (2014) 「台湾原住民のタバコ文化」、日本順益台湾原住民研究会編・野林厚志主編『台湾原住民研究の射程』台北：順益台湾原住民博物館、181-202頁。
- 黄應貴 (2012) 『「文明」之路1～3巻』中央研究院民族學研究所。
- 五十嵐真子・三尾裕子編 (2006) 『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用——』 風響社。

- 伊能嘉矩著・森口恒一編（1998）『伊能嘉矩蕃語調査ノート』台北：南天書局。
- 石垣直（2011）『現代台湾を生きる原住民——ブヌンの土地と権利回復運動の人類学——』風響社。
- 上水流久彦（2011）「『周辺』にみる国民国家の拘束性——台湾人の八重山観光を通して——」、『北東アジア研究』20号、51-66頁。
- 上水流久彦（2012）「台湾の本土化後にみる外省人意識」、沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』アジア経済研究所、139-173頁。
- 上水流久彦（2016）「台湾の植民地経験の多相化に関する脱植民地主義的研究——台湾の植民地期建築物を事例に——」、三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化——』慶應義塾大学出版会、261-288頁。
- 上水流久彦（2017）「中華民国の台湾化にみる金門の位置づけに関する一考察」、『アジア社会文化研究』18号、65-88頁。
- 上水流久彦・村上和弘・西村一之編（2017）『境域の人類学——八重山・対馬にみる「越境」——』風響社。
- 紙村徹（2014）「『パリジャリジャオ首長国』大首長の贈与交換形態の典型とその変形と屈折・転倒（前篇）——1867年から1872年までの台湾南部恒春地方の歴史人類学的考察——』『台湾原住民研究』18号、38-74頁。
- 笠原政治（2006）「日本順益台湾原住民研究会・台湾原住民研究会の10余年』『台湾原住民研究』10号、220-230頁。
- 笠原政治（2010）「馬淵東一先生の生誕百年を迎えて——第2回日台原住民研究フォーラムの開催——』『台湾原住民研究』14号、162-172頁。
- 笠原政治（2012）「台湾原住民を俯瞰する——伊能嘉矩の集団分類をめぐる——』『台湾原住民研究』16号、3-31。
- 笠原政治（2013）「森丑之助と台湾原住民の分類』『台湾原住民研究』17号、3-23頁。
- 笠原政治（2014a）「旧慣調査と原住民の分類」、日本順益台湾原住民研究会編・野林厚志主編『台湾原住民研究の射程——接合する過去と現在——』台北：順益台湾原住民博物館、9-31頁。
- 笠原政治（2014b）「名著『台湾高砂族系統所属の研究』をどう読むか（前篇）』『台湾原住民研究』18号、75-96頁。
- 笠原政治（2015）「名著『台湾高砂族系統所属の研究』をどう読むか（後篇）』『台湾原住民研究』19号、136-163頁。
- 笠原政治（2016）「伊能嘉矩の原住民分類における諸種の資料源』『台湾原住民研究』20号、5-27頁。
- 笠原政治（2017）「伊能嘉矩と平埔族の分類』『台湾原住民研究』21号、3-37頁。
- 笠原政治編 [楊南郡訳]（1995）『台湾原住民映像——淺井惠倫教授撮影集——』台北：南天書局。
- 笠原政治編（2010）『馬淵東一と台湾原住民研究』風響社。
- 木村自（2016）『雲南ムスリム・ディアスポラの民族誌』風響社。
- 黒崎岳大（2017）「書評 三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化——』——台湾と旧南洋群島を比較し、植民地をめぐる歴史認識を再考する——』『日本台湾学会報』19号、110-116頁。
- 林麗英（2013）「原住民生業の現代的な位置づけ——台東県太麻里郷・パイワン族のアワ栽培と収穫祭復興の事例から——』『台湾原住民研究』17号、118-140頁。
- 林美容・三尾裕子・劉智豪（2017）「田中綱常から田中將軍への人神変質——〈族群混滅〉の民衆史学——」、『日本台湾学会報』19号、50-70頁。
- 馬淵悟（1995）「『うぬぼれ鏡』としての台湾原住民の日本人観』合田涛・大塚和夫編『民族誌の現在——近代・開発・他者』弘文堂、125-141頁。
- 馬淵東一著 [楊南郡訳]（2014）『臺灣原住民移動與分布』台北：行政院原住民族委員會・南天書局。
- 馬淵東一著・楊淑媛主編（2017）『馬淵東一著作集第一卷』台北：中央研究院民族学研究所。
- 松田ヒロ子（2013）「近代沖縄の医療と台湾——沖縄県出身者の植民地医学校への進学——（特集 沖縄における引揚体験の記憶と意味の構築：台湾、満洲、フィリピンを中心に）」『移民研究』9号、97-122頁。
- 松田ヒロ子（2016）「植民地台湾から米軍統治下沖縄への「帰還」（特集 帰還現象から移民研究の諸概念を問い直す）」『文化人類学』80巻4号、549-568頁。
- 松岡格（2012）『台湾原住民社会の地方化—マイノリティの20世紀』研文出版。
- 松岡格（2014）「日本統治下台湾の身分登録と原住民——制度・分類・姓名——」、日本順益台湾原住民研究会編・野林厚志主編『台湾原住民研究の射程——接合する過去と現在』台北：順益台湾原住民博物館、33-75頁。
- 松岡格（2015）「台湾原住民と姓名・住民登録・エスニシティ——可視化と公的書類と社会の間の関係研究——（国際シンポジウム「姓名とエスニシティ」特集）」『マテシス・ウニヴェルサルリス』16巻2号、23-39頁。
- 松澤員子（1999）「日本の台湾支配と原住民の日本語教育——パイワン社会におけるカタカナの受容——」、栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ——』人文書院、326-345頁。

- 三尾裕子 (2009) 「パネルディスカッション報告 台湾研究この10年——台湾を対象とした人類学の発展過程——」『日本台湾学会報』11号、57-65頁。
- 三尾裕子 (2017) 「植民地経験、戦争経験を「飼いならす」——日本人を神に祀る信仰を事例に——」『日本台湾学会報』19号、14-28頁。
- 三尾裕子編 (2006) 「特集 台湾における日本認識」『アジア・アフリカ言語文化研究』71号、45-203頁。
- 三尾裕子編 (2016) 「特集 外来権力の重層化と歴史認識——台湾と旧南洋群島の人類的比較研究——」『文化人類学』81巻2号、217-301頁。
- 三尾裕子・遠藤央・植野弘子編 (2016) 『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化——』慶應義塾大学出版会。
- 宮岡真央子 (2011) 「台湾原住民族研究の継承と展開」、山路勝彦編『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史——』関西学院大学出版会、77-119頁。
- 宮岡真央子 (2015) 「命名・分類、社会環境、民族意識——サアロアとカナカナブの正名にみる相互作用——」『台湾原住民研究』19号、22-46頁。
- 宮岡真央子 (2017) 「書評 清水純著『画像が語る台湾原住民の歴史と文化——烏居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探求——』過去の探索から知る台湾原住民の現在」『日本台湾学会報』19号、90-96頁。
- 宮岡真央子 (2018) 「今日の台湾における伊能嘉矩の“踏査”——国立台湾大学図書館特別展「重返・田野：伊能嘉矩與臺灣文化再發現」——」『台湾原住民研究』22号、151-156頁。
- 宮崎聖子 (2008) 『植民地期台湾における青年団と地域の変容』御茶の水書房。
- 宮崎聖子 (2011) 「陸軍士官学校と台湾人」『文芸と思想』75号、111-129頁。
- 宮崎聖子 (2013) 「植民地期台湾における国語保育園 (第41回南島史学会大会論集)」『南島史学』79・80号、170-160頁。
- 森田真也 (2013) 「異郷に神を祀る——沖縄石垣島の台湾系華僑・華人の越境経験と宗教的实践——」『沖縄民俗研究』32号、1-19頁。
- 中村平 (2013) 「『困難な私たち』への遡行——コンタクト・ゾーンにおける暴力の記憶の民族誌記述——」、田中雅一・奥山直司編『コンタクト・ゾーンの人文学IV ポストコロナル』晃洋書房、30-54頁。
- 中村平 (2018a) 「台湾高地先住民の土地と生の囲い込み——日本植民国家—資本による人間分類と『理蕃』——」、今西一・飯塚一幸編『帝国日本の移動と動員』大阪大学出版会、83-110頁。
- 中村平 (2018b) 『植民暴力の記憶と日本人——台湾高地先住民と脱植民の運動——』大阪大学出版会。
- 中生勝美 (2016) 『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶——』風響社。
- 日本順益台湾原住民研究会編 (1999) 『伊能嘉矩所蔵台湾原住民写真集』台北：順益台湾原住民博物館。
- 西村一之 (2014) 「蕃務本署調査課と「理蕃」——佐倉孫三を通して——」『日本女子大学紀要 人間社会学部』24巻、17-32頁。
- 野林厚志 (2009) 「文化資源としての創作物——原住民族芸術をめぐる民族の関係性——」『民族藝術』25巻、44-49頁。
- 野林厚志 (2010) 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義——」『国立民族学博物館研究報告』34巻4号、623-679頁。
- 野林厚志 (2011) 「台湾原住民族の文化的営為としての狩猟活動」、松井健・名和克郎・野林厚志編『グローバリゼーションと〈生きる世界〉——生業からみた人類学的現在——』昭和堂、167-207頁。
- 野林厚志 (2012) 「工芸生産をめぐる民族間関係——台湾におけるマジョリティとマイノリティの相互作用——」、松井健・野林厚志・名和克郎編『生業と生産の社会的布置—グローバリゼーションの民族誌のために』岩田書店、209-238頁。
- 野林厚志 (2013) 「物質文化に投影される平埔族の自然観——国立民族学博物館の酒器の資料を事例として——」、国立台湾歴史博物館編『看見平埔』台南：国立台湾歴史博物館、64-71頁。
- 野林厚志 (2014a) 「前言」、日本順益台湾原住民研究会編・野林厚志主編『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在——』台北：順益台湾原住民博物館、4-6頁。
- 野林厚志 (2014b) 「平埔族の物質文化の境界性——国立民族学博物館の収蔵資料を事例として——」日本順益台湾原住民研究会編・野林厚志主編『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在——』台北：順益台湾原住民博物館、341-368頁。
- 野林厚志・松岡格編 (2019) 『台湾原住民の姓名と身分登録』(国立民族学博物館調査報告147) 国立民族学博物館。
- 野林厚志・宮岡真央子 (2009) 「台湾の先住民とは誰か——原住民族の分類史と〈伝統領域〉概念からみる台湾の先住性——」、窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか』世界思想社、293-317頁。

- 沼崎一郎（2012）「台湾の多元化と多層化——1990年以降のエスニシティと社会階層——」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』アジア経済研究所、37-68頁。
- 沼崎一郎（2014）『台湾社会の形成と変容——二元・二層構造から多元・多層構造へ——』東北大学出版会。
- 沼崎一郎（2016）「台湾における日本語の日本文化／日本人論」、桑山敬己編『日本はどのように語られてきたか——海外の文化人類学的・民俗学的日本研究——』昭和堂、371-405頁。
- 沼崎一郎（2017）「台湾映画『KANO——1931海の向こうの甲子園——』をどう観るか——人類学的ポストインペリアル批評の試み——」、『東方』432号、9-15頁。
- 沼崎一郎（2018）「台湾映画『セデック・バレ』をどう観るか——続・人類学的ポストインペリアル批評の試み——」、『東方』443号、11-17頁。
- 岡田紅理子（2012）「台北に移住した原住民族キリスト者——カトリック教会の活動にみるアミの人々と原住民族神学——」『宗教と社会』18号、3-17頁。
- 岡田紅理子（2013）『都市原住民の生活誌——台北に移住したアミの「都市」、「故郷」、「共同体」——』（Occasional Papers No.13）上智大学アジア文化研究所。
- 岡田紅理子（2015）「原住民族神学の実践から「インカルチュレーション」を考える——台湾原住民族アミの共同体の幹部、義務使徒による運営を事例として——」『日本カトリック神学会誌』26号、159-186頁。
- 泉水英計（2010）「極東の「フロンティア」——米国人歴史家が語る冷戦期の琉球と台湾——（特集 歴史と民俗の語り方）」『歴史と民俗』26号、15-51頁。
- 泉水英計（2012）「ジョージ・P・マードックと沖縄——米海軍作戦本部『民事手引』の再読から——」『歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集』、217-244頁。
- 清水純（2014）『画像が語る台湾原住民の歴史と文化——鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探求——』風響社。
- 清水純（2016）「20年目を迎えた『台湾原住民研究』」『台湾原住民研究』20号、161-165頁。
- 末成道男（2016）「『台湾原住民研究会』発足と本誌創刊の前後」『台湾原住民研究』20号、175-179頁。
- 角南聡一郎（2014）「台湾原住民の「蕃刀」——研究の歩みを中心に——」、日本順益台湾原住民族研究会編・野村厚志主編『台湾原住民族の射程——接合する過去と現在——』台北：順益台湾原住民族博物館、109-135頁。
- 角南聡一郎（2016）「日本国内の台湾原住民族資料の概要」『台湾原住民研究』20号、75-89頁。
- 台北帝国大学土俗・人種学研究室原著 [楊南郡訳註]（2011）『臺灣原住民族系統所属之研究』台北：行政院原住民族委員会・南天書局。
- 蛸島直（2015）「台湾原住民の鳥占の多様性をめぐって」『台湾原住民研究』19号、3-21頁。
- 蛸島直（2019）「プマの占い鳥をめぐる知識の多様性と変化」『台湾原住民研究』22号、3-51頁。
- 田本はる菜（2012）「『原住民工芸』の表象と制作をめぐる一考察」『史学』81巻3号、91（445）-113（467）頁。
- 田本はる菜（2015）「台湾原住民族の機織にみる「外来技術」の再編——南投県セデックにおける高機移入を中心に——」『台湾原住民研究』19号、103-135頁。
- 鳥居龍蔵写真資料研究会編（1990）『東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ 第1-4部（東京大学総合研究資料館 標本資料報告第18-21号）』東京大学総合研究資料館。
- 植野弘子（2011）「序論（〈特集〉台湾をめぐる境域）」『白山人類学』14号、1-6頁。
- 植野弘子編（2011）「〈特集〉台湾の境域をめぐる」『白山人類学』14号、1-156頁。
- 植野弘子編（2018）『〈特集〉モノと人の移動にみる帝国日本——記憶・近代・境域——』『白山人類学』21号5-154頁。
- 植野弘子・三尾裕子編（2011）『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶——』風響社。
- 若林正丈（2007）「台湾の重層的脱植民地化と多文化主義」、鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶應義塾大学出版会、199-236頁。
- 若林正丈（2012）「書評 石垣直著『現代台湾を生きる原住民——ブナンの土地と権利回復運動の人類学——』」『アジア経済』53巻4号、155-158頁。
- 山田仁史（2014）「夢占と鳥占——台湾原住民と東南アジアを中心に——」『台湾原住民研究』18号、3-26頁。
- 山田仁史（2015）『首狩の宗教民族学』筑摩書房。
- 山路勝彦（1991）「〈無主の野蛮人〉と人類学」『関西学院大学社会学部紀要』64号、39-71頁。
- 山路勝彦（1994）「植民地台湾と〈子ども〉のレトリック」『社会人類学年報』20巻、63-87頁。
- 山路勝彦（2011a）『台湾タイヤルの100年——漂流する伝統、蛇行する近代、脱植民地化への道のり——』風響社。
- 山路勝彦（2011b）「馬淵東一と社会人類学」、山路勝彦編『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史——』関西学院大学出版会、299-341頁。
- 山路勝彦（2013）「書評 石垣直著『現代台湾を生きる原住民——ブナンの土地と権利回復運動の人類学——』」『文化人類学』78巻3号、424-426頁。

- 山本芳美 (2014) 「明治初期の新聞錦絵とかわら版にみる牡丹社事件——想像された台湾出兵と台湾原住民族——」、日本順益台湾原住民研究会編・野林厚志主編『台湾原住民研究の射程——接合する過去と現在——』台北：順益台湾原住民博物館、247-285 頁。
- 横田祥子 (2008) 「グローバル・ハイパガミー?——台湾に嫁いだベトナム人女性の事例から—— (特集) 東アジアの家事・介護をめぐる女性の域内移動——台湾の外国人労働者と結婚移民の事例から——」『異文化コミュニケーション研究』20号、79-110 頁。
- 横田祥子 (2011) 「台湾漢族の高齢者の扶養形態——「輪食」から「輪照」へ——」、『貿易風—中部大学国際関係学部論集』6号、62-76 頁。
- 横田祥子 (2014) 「台湾結婚事情 (特集 途上国の出会いと結婚)」『アジア研ワールド・トレンド』20 卷 7号、10-13 頁。
- 横田祥子 (2016a) 「東南アジア系台湾人の誕生——五大エスニックグループ時代の台湾人像——」、陳來幸・北波道子・岡野翔太編『アジア遊学 交錯する台湾認識——見え隠れする「国家」と「人びと」——』204号、142-153 頁。
- 横田祥子 (2016b) 「インドネシア華人女性の国際結婚を通じた世帯保持——西カリマンタン州シンカワン市の事例から——」『華僑華人研究』13号、27-44 頁。
- 尤驍 (2019) 「現代社会におけるルカイ大頭目の権威の再構築——「伝統のシンボル」と「利他的な貢献者」——」『台湾原住民研究』22号、52-84 頁。

インターネット資料

- 鳥居龍蔵研究会・東京大学総合博物館「民族学フィールドワークの先覚者 鳥居龍蔵とその世界」<http://torii.akazawa-project.jp/cms/index.html> (2019年3月28日最終閲覧)
- 東京大学総合研究博物館「東アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース」http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/torii_catalogue/hajime.php (2019年3月28日最終閲覧)
- 台湾大学図書館「重返・田野——伊能嘉矩與臺灣文化再發現」http://www.lib.ntu.edu.tw/events/2018_InoKanori/index.html (2019年3月28日最終閲覧)

謝辞

原住民族研究にこだわってきた筆者が、人類学研究全体を回顧することは相当に難しかった。しかし、これまで原住民族研究の枠組みを超えたいくつかの共同研究の場に加えさせていただいたことで、本稿の執筆は可能になった。ここに付記し、関係各位への謝辞としたい。